

〔巻頭言〕

## 21世紀のグローバル化における家族看護学

神戸大学大学院保健学研究科

家族看護学分野・家族支援CNSコース

法橋 尚宏

学問の世界は、もともとグローバルで国境がない。社会をみても、日本では、遣隋使の時代からグローバル化はあるし、明治維新以来のグローバル化には目覚ましいものがある。現在、スーパーグローバル大学、世界大学ランキングなどに象徴されるように、グローバル化という言葉が日本において流行している。しかし、海外留学、外国人教員の採用、国際共同研究の推奨などは、明治時代初期の政策と本質的には変わらない気がする。輸入して新しい知識を学び、消化して根付かせ、そして新しく創造し、輸出するレベルまで昇華させなければ意味が薄い。

現在の日本では、世界に通じる研究ができる大学、世界で戦える大学はどこかが問われ、各大学が改革に取り組んでいる。しかし、世界大学ランキングでは、アジアの大学の全体的な躍進が目立つ中、日本の大学の凋落が続いている。グローバル化を推進することにより、逆に国際競争力の低下している日本の大学が淘汰されるという構図にある。スーパーグローバルという和製英語を使用するようでは、日本の大学の真のグローバル化は難しいようにも感じる。

家族看護学のグローバル化を牽引しているのが、国際的なアカデミー組織である International Family Nursing Association (IFNA) である。32カ国から396名が会員になっており、アメリカ(164名)に次ぎ、日本(47名)は2番目に会員数が多い。2017年6月に、IFNAが主催する13th International Family Nursing Conferenceがスペインで開催され、日本からの参加者は37名であった。2015年8月にデンマークで開催された12th International Family Nursing Conferenceでは、日本からの参加

者は115名であったことに比べると激減した。会期中は、さまざまなセッションで白熱した議論があったが、筆者を含め、日本人の国際的プレゼンスは必ずしも高いとはいえない。英語を国際語としてグローバル化が進展する中、日本人の英語力が問われる場面が多いことを痛感する。

グローバル化という言葉を多用したり、海外留学を無批判によいと考える海外崇拜などは、日本がグローバル化に遅れていることの証左ともいえる。なお、英語を学ぶという点では海外に行く必要性は必ずしもないし、知識を得るという受動的なスタンスで留学してもよい成果は期待できないだろう。

日本の家族看護学は、海外へのキャッチアップ型からイノベーション型に転換する必要がある。そのためには、まず、海外の家族看護学研究との違いを明確に認識し、日本にしかできない付加価値研究に焦点をあてるべきであると考えられる。すなわち、日本オリジナルの家族看護学を大切にすることが前提であり、ユニークな発想と創造性を豊かに新しい切り口を開くという心構えが不可欠である。その上でエビデンスレベルが高く、独創的・先進的な世界に通じる研究と実践を構築しなければならない。国内外の家族を対象としたトランス文化家族看護学研究をするのもよいだろう。そして、日本の家族看護学の研究と実践を日本国内に留めず、世界に発信するとよい。Journal of Family Nursing (JFN)をはじめとして、あまたの国際誌が存在している。

近い将来、日本の家族看護学が一層発展をとげ、21世紀のグローバル化ともいえる世界をリードすることを願っている。そのときには、グローバルは当たり前になって、グローバル化という言葉は聞かれなくなるだろう。